

今年(2002)は、帯広にとっては記念すべき年である。開拓団晩成社が当地に入植して、120年、市制施行50年である。その記念すべき秋^{とまき}に開拓当時の労苦を偲ぶのも故なき事ではなかろう。今、私の手元に、「北海道郷土史(十勝・根釧・北見篇) 陸上自衛隊第五管区總監部」と「懇跡(晩成社の功績)」という2冊の書物がある。これらは何れも帯広駐屯地道東資料館の倉庫に誰の目に触れることなく眠っていたものを広報の諸官が掘り起こしてくれたものである。

これらの資料から晩成社の歴史を瞥見したい。題名の「一つ鍋」は最後まで読んで頂ければお分かり頂けよう。六花亭の宣伝をする意図は毛頭ないので、念の為。

北海道郷土史の「依田勉三と晩成社」の章は、A5版6頁に亘っており、その全てを紹介する訳にも行かないので、要点のみ、紹介する。

(前言) 略

(1) 調査と準備(要約)

昭和14年及び15年、依田勉三等は、入植適地調査を行い、「帯広村の肥沃にして、開豁するには如かずと思考」として、帯広への入植を決定した。晩成社の創設、北海道庁への願書提出、株主の募集等々の準備を着々と推進。学友で同志の渡辺錠太郎は越年残留した。(晩成社の名称については、「大事を遂行するには、須く大器晩成でなければならぬ」との考えから名付けられた。)

(2) 入植の様相(要約)

晩成社同人一行(13戸、27人)は、明治16年4月10日横浜港から出帆、函館着。函館からは陸・海の2道に分かれ、目的地を目指した。海上隊は、順風に恵まれず、避難を続けつつも辛うじて大津に到着、帯広から迎えに来た錠太郎の案内で十勝川を遡上、3泊4日の行程で明治16年5月14日帯広に着倒。一方、陸行隊は、依田勉三が指揮し、暦舟川を遡り、雪に悩まされつつ、或いは、空き小屋に、或いは、野宿をと苦難の行程を重ね、広尾街道を北上、5月9日に帯広に到着。途中病人1名を残置したので、越年した錠太郎を含めて総勢28名(男:20名、女:8名)、平均年齢27歳、最年長52歳、最年少1歳であった。

(3) 経営の困難(項目列挙)

- ① 釘も縄もない状況での住居の建築
- ② 落角拾いによる野火の脅威
- ③ 幾万、幾千万に及ぶ蝗(いなご)の大群の襲来
- ④ 兎・鼠・鳥による被害も想像を絶する。
- ⑤ 霜雨、冷寒による作物の不作、糠蚊(ぬかか)に起因する瘧(おこり:マラリア)の流行
- ⑥ 大津集積の食料の運搬、丸木舟での遡上は非効率、大津貯蔵米の無断流用
- ⑦ 調理法を知らぬ麦の実、ウバユリ、イラ草、フクラベ、アカザ、フキ、アイヌネギ等の代用食による下痢

(4) 方針転換とその成果

理想と現実の落差に失意落胆する者の慰撫と新規事業の起業

① 主畜農場の経営 ② 馬鈴薯を原料とする澱粉工場、ハム、缶詰工場、
バター、ミルクの製造等 ③ 水田、養蚕、椎茸栽培

開拓した畑： 約600町、道路開墾：5千間余、堤防築造1800間、投げ出した私財40万円

(以下全文記述)

この依田勉三の血みどろの開拓によって、晩成社が得たものは、莫大な借金だけであつた。晩成社は、矢折れ、弾丸盡きて遂に解散した。勉三は1反の畑も、1反の水田も、残らなかつた。勉三の頭はすでに白く、40年の苦労は、深いしわとなつて、額にきざまれていた。

勉三の考え方は、その時代より20年、30年進み過ぎていた。その為に事業は、ことごとく失敗した。しかし、この失敗は、十勝開拓の大きな役割を果たしたのだ。日本の穀倉といわれる大十勝は、依田勉三始め、晩成社の人々の、屍の上から建設されたのである。大正14年12月12日、中風と云う病気で、身体を自由を失つた勉三は、枕もとに十勝の地図を開かせ、「晩成社には、何も残らなかつた。だが十勝は・・・」と云い、静かな笑み浮べ、73才の多難の一生を絶つた。(郭公の里より)

晩成社の指導幹部としては、依田勉三、鈴木錠太郎、渡辺勝の3人であつたのであるが、渡辺勝の妻カネは、錠太郎の妹に当り、開拓の蔭に咲いた、女性の1人であつた。カネは帯広に市制が施行されたとき、その感慨を、次のように詠んでいる。

十勝野や、枯株に咲く、リリの花

老木に、やっと咲いたか、梅の花

また、開墾当時の或る夏、畑仕事の最中に大夕立が降つた時、鈴木親長(錠太郎、カネの父)は、「武士の、弓矢とる手を、けがさじと、開く田畑に、注ぐ村雨」

と詠んでいるが、これは武士の面目にかけても、開墾はやりとげねばならない、と云う強い決意の程がうかがわれる。今一つ、最も端的に、開拓の苦労が表現されているのが、有名な「一つ鍋」の句である。錠太郎が、豚の飼料に馬鈴薯を煮たとき、自分達の分も、一緒に炊いたので

落ちぶれた、極度に豚と、一つ鍋

と駄句つたところ、勉三は、「僕の家内は豚の飼料に煮た中から、良いのを俺達に食はせる」とて、

開墾の、初めは豚と、一つ鍋

と訂正した、と云われている。晩成社開墾余談として、興味が深い。今帯広では、当時のおもかげを偲び「一つ鍋」という菓子が土産物に数えられている。帯広では、依田勉三を開拓の祖とし、長くその功を讃えるため、東3条3丁目(帯広袖杜前)に、その銅像が建立されている。

写真は追ってアップします。